ISSN 0915－6925

大学アーカイヴズ

東日本大学史連絡協議会会報

1994. 3. 15 No. 10

Association of College and University Archives of Eastern Japan

目　次

中村雄二郎氏「近代史としての大学史」について …… 鈴木秀幸 1
寺崎昌男氏講演「大学史と大学史編纂について」を聞いて …… 中野 実 4
1993年度合同研究部会報告 …… 中川壽之・松崎 彰 5
『武蔵七十年史－写真でつづる学園のあゆみ』編纂について …… 大坪秀二 9
常任委員会議事録（抄） ……10
研究部会記録（抄） ……11
『大学アーカイヴズ』NO. 1～NO. 9総目次 ……11
ミニ情報 ……12
ご案内 ……12

1993年10月6日（水）合同研究部会

記念講演の概要
中村雄二郎氏「近代史としての大学史」について

明治大学歴史編纂事務室　鈴 木 秀 幸

東日本大学史連絡協議会・西日本大学史担当者会1993年度合同研究部会の第1日目は10月6日(水曜日)14時より、明治大学大学会館5階の父兄センター会議室において行われた。

同会は、その前日より開催されている「明治大学の歴史展」の一環としての記念講演会と連携する形となった。参加者（聴講者）は本会関係者が69名、明治大学および一般の方が81名、総計150名であった。

当日は、内河久平同大学歴史編纂事務長の司会により岡野加穂留同大学学長から挨拶があり、続いて百年史編纂委員長中村雄二郎法学部教授より講演があった。最後に筆者が『明治大学百年史』編纂と「明治大学の歴史展」について具体的な説明をした。

岡野学長は東京帝国大学法科大学が官吏養成大学として国家から全面的な保護を受ける中、明治法律学校（明治大学）は創立以来の「自由・平等・博愛・友愛」という近代ブルジョア思想を脈々と受け継いでいったことを恩師であり、前任者の弓家七郎教授の言を引きながら話した。

「近代史としての大学史」と題した中村委員長の講演内容の概要は以下の通りである。

まず、最初に今「なぜ大学史なのか」と題し、大学史の研究および編纂の目的や意義について、次のように述べた。歴史というのは起源や具体的経過を考えることによりアイデ

ンティティを確認していくことである。そうすることにより確認した歴史に照して現状を、そして未来を考えていかなければならない。一方、大学の社会的な役割は知的財産を継承し、発展させる「場」としての「情報センター」である。その場は「出合いの場」とでもいうべきものである。その意味では他の歴史と比べて大学史はプラスの意味において特異なものである。そうした大学の歴史を見ていくことは大いに意義がある。

次に「大学史の落とし穴」と題して、大学史を叙述していく際、留意すべきことを指摘した。

中村雄二郎氏の講演

全体的に各大学の年史は自画自賛・自己満足、あるいは特定の人物群の顕彰になっている。その結果「誰にも読まれない記念品」となってしまう。そのことに全く意味がないというわけではないが、そのようにならないように工夫する必要がある。

次に「近代史という補助線」ということについて、次のように述べた。大学史は「近代化」（工業化・民主化）した社会の所産であるという観点がきわめて重要である。言い換えれば近代史の中に大学を置くべきであるともいえる。

さらに次には「〈近代史としての大学史〉のいくつかの側面」として、大学史を見るためのメルクマールを示した。その項目だけを記すと以下のようである。

「資本主義と大学」、「民主主義と大学」、「社会風潮と大学」、「若い世代と大学」、「卒業生と大学」、「教職員と大学」

これらの項目名からも察知できるように大学および大学の歴史とは近代化・合理化とそうではない側面等々、柔構造性を有している。したがって、そのような面も追ってみなければならない。例えば、大学は明治以降の近代化、富国強兵化する日本社会の中で工業化を担うとともに、一方では批判精神（社会正義）の拠点でもあった。

明治大学岡野加穂留学長の挨拶

最後に「明治大学史に即して」と題し、以上の観点や方法等により進めた『明治大学百年史』（以下『百年史』）の編纂を以下の４点に分けて述べた。

まず(1)「編纂方針について」。従来の本学大学史編纂が「誕生物語」的であり、いわば自分達の起源を探り、できれば面白い話をたくさん盛り込むものであったこと、また本学は早稲田大学や慶應義塾大学のようにシンボル的な創立者の教育精神や教育方針が強いわけではないことなどをプラスに思考していくと、やはり日本近代化を調べるには明治大学史を研究・編纂すればよいということになった。

(2)「資料操作と記述方法」について。近代史学の方法をとる以上、資料は質量ともに問われる。その点、本学は関係者の協力や担当部署の努力により「大学史料館」の構想ができるほどになった。執筆は各学部にわたる多くの者により共同で行い、リーダブルなものになるように委員長（講演者）が監修をした。

(3)「時期区分」について。第一編「維新変革と明治法律学校の創立」から第八編「紛争と大学改革」まで八編の構成とした。それらのタイトルには「維新変革」、「紛争」といったような類の語がみうけられる。ここにも「近代史の中の明治大学」という視点がよく表現されている。

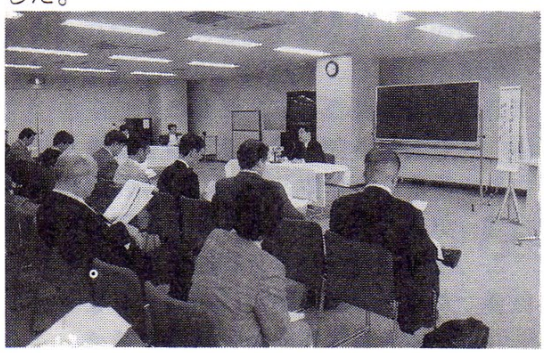
(4)「ハイライト」について。近代史全体をカバーしている『明治大学百年史』の中でハイライトとなるとこはどこか、具体的に指摘

をした。例えば第三編では産業社会の発展と留学生受け入れといった問題についてとりあげた。

そして最後に、大学史の研究・編纂は安易に物語風にしてもいけないし、研究論文を集めたものでもいけない。やはり近代化とか近代史をポイントとしていかなければならない。それが、ひいては歴史学の中で、一つの新しい突破口となろうと結んだ。

このあと、筆者が「『明治大学百年史』編纂と「明治大学の歴史展」について」と題しそれらについて必要な説明を行った。

まず明治大学における大学史編纂の歩みについて『百年史』とそれ以前に分けて説明した。『百年史』以前の年史は、ほとんどが事例やエピソードを編年的に列記した『明治大学史』（二十年史）の改版・訂正版であるとした。



鈴木秀幸氏の報告

一方、『百年史』は編纂の体制や内容ともにかなり本格的なものである。そのことについて歴史編纂資料室の開設、基礎資料集『報告書』や研究誌『明治大学史紀要』あるいは写真集『図録明治大学百年』の刊行を例にして述べた。さらに本編の刊行状況にもふれた。

次に２点目として本編（『百年史』）のうち、とくに第３巻（通史編Ⅰ）を中心として構成内容や特色等について説明した。このことについては、さきの委員長の講演と重複するので、以下の点を簡潔に述べた。

(1)普遍性・客観性の重視…個人や特定のものの顕彰をしない。明治大学史を日本の近代史の中に位置付ける。

(2)背景・周辺の考慮…ゆえに、時代や社会やあるいは、地域の背景や事情を常に念頭に置く。

(3)実態の解明…しかも単なる制度的な側面だけではなく、実態的な面もほりさげる。

(4)分野の拡大…対象とする分野も、学生の生活、校外生や留学生の動向、あるいは校歌や学生歌の制定などと広げる。

次に３点目として「明治大学の歴史展」について、おもにその歩みと開催目的について述べた。

まず、本学のこれまでの歴史展についてふれたのち、今回のものは実に43年ぶりであり、準備上、かなり試行錯誤したことについてふれた。続いて、展覧会開催の目的として次の３点をあげた。

(1)これまで編纂過程で収集したり、把握できた資料について、感謝の意味も込めて公開する。

(2)これから刊行する百年史の通史編Ⅱについて ＰＲをするとともに、不足の資料の収集についてご協力をお願いする。

(3)編集の次の段階に当然、位置付けるべき大学史料館（史料の保存・利用の機関であり、アイデンティティの場でもある）の設置について、理解と協力を求める。

なお、展覧会の内容構成はさきに述べた『百年史』の構成内容・特色を極力、生かすことに留意した。ということを申し添えた。

このあと、１階上の展覧会場に移動し、３グループに分かれて、第１コーナーは筆者が、第２コーナーは福井調査員が、第３コーナーは渡辺室員が説明させていただいた。

「明治大学の歴史展」を見学

最後に、再び本会のような研究部会が明治大学で催される時、場所は新たにオープンした明治大学史料館であることを祈念して筆を置く。今回の本学の展覧会にご協力いただいたことを感謝し、あわせて、これからのご指導をよろしくお願いいたします。

1993年10月7日（木）合同研究部会

寺崎昌男氏講演「大学史と大学史編纂について」を聞いて

東京大学史史料室　中野　実

1993年10月7日、第2回合同研究部会が開催され、標題の記念講演が行なわれた。講演は氏の四半世紀以上にわたる近代日本の大学史研究と沿革史編纂へのかかわりを基礎に構成されており、大変示唆に富む内容であった。

当日講演者から配付されたレジュメを掲出しておこう。講演の全体像を摑んでいただけたらと思う。ここではレジュメⅡの2の後半から概要を記し、それ以前については講演者の文献を文末に掲げそれに代えた。

〈レジュメ〉

大学史と大学史編纂について

はじめに　このような集まりが持たれることの画期性について

Ⅰ　大学史というものの歴史的に負ってきた落ち着きの悪さ

1　教育史の中で　師範学校教育史の伝統学問と教育の区別

2　歴史研究一般の中で　現代史は歴史ではない

Ⅱ　日本の大学史編纂の歴史と状況

1　戦前　同窓意識による記念誌的大学史
素朴な歴年体的整理
希少な専門家執筆
どこから見ても「学問」ではない
nebenの仕事
執筆権限の集中
タブーには触れない　暗黙の了解？

2　戦後　画期的な『東北大学50年史』
—特質とそれを支えた専門家的力量—
70年代以後のスタート
80年代に入ってからの飛躍
紛争の影響（あるいは紛争後事態への配慮）
50年代以降にうまれた若い研究的エネルギーの参加

Ⅲ　現在の問題と課題

講演する寺崎昌男氏

問題

1　学内資料の不足と保存の立ち後れ
東大の場合　周辺資料の重要性

2　教育・研究体としての大学の構造のつかまえにくさ　事件史と生理史

3　社会史の難しさと共通した問題

4　大学教師側の問題「業績」にならない仕事　協同体制の組みにくさ

課題

1　史料整備の進展　その社会的承認
university archivistの重要性

2　大学史編纂の意味 沿革史はuniversity identity確認と主張の役割を持つ

3　個別大学史を通しての近・現代日本史（社会・文化・教育・政治・経済史）へのアプローチ　引用される沿革史を！

大学史編纂の状況は1980年代から一変し、漸く日本の大学史編纂は離陸期に入り、新たなチャンスが訪れている、という。その背景には大学紛争があり、大学史研究もまたその影響を受けた。編纂のための状況が変化したのである。さらに1950年代の若い研究者は大学の無力化の結果、研究の環境がかわり新しいことへの挑戦や新分野の開拓にむかっていった。教育史でいえば初等教育史パラダイムから開放された。

講演者が重点に置いたのはⅢであった。まず問題１では法制度的史料でなく、教育研究に近い史料―たとえば授業時間割など―が不足しており、法制度的、基幹的史料とともに周辺史料―地域の新聞、学友会雑誌、ＧＨＱ／ＳＣＡＰ文書など―の地道で息の長い収集の仕事の重要性が強調された。２では近代日本の大学の場合、自生的部分と法制度的な統制との接点、連関が非常に捕まえにくい。思想史と制度史とを統合したような、あるいは事件と事件とをただつなげたようなものではなく、その事件を生んだステージ、舞台をもあきらかにした大学の生理史こそが、沿革史として成功したものである、と述べられた。３では断片史料の収集と保存について、アメリカでの大学アーカイヴスの体験を披露して述べられた。断片的史料の保存は卒業生などに働きかけて長い期間と充分な注意が払われた努力の結晶である。それを支えるのはその大学の歴史であり、配慮である。日本ではいま始まったばかりである。最後の４では教員と職員との有機的な関係を築く重要性を、編纂体制の円滑化、編纂に際しての史料の自由な利用などを例示しながら指摘された。教員では歴史畑のものはもちろんであるが、ごく少数かもしれないが、歴史に関心を持つ教員をしっかりつかんでおくことも大切であり、思わぬ成果が生まれる場合もある。

最後の課題では、史料整備は当然進展させなければならないし、府県立の文書館のアーキビストの養成ばかりでなく、大学アーキビストの果たすべき役割の重要性を社会的に認知させるために文部省への働きかけを提唱された(1)。近年、大学の設置基準の大綱化、大学改革の中で、大学史編纂、沿革史に新しい意味が出てきた。それは大学のアイデンティティのもっとも詳しいものが沿革史であり、それをどんどんレビューしてまさに相互点検、相互評価の材料とすることが出来ると述べられた(2)。そして大学史は、まさに近代史そのものへのアプローチであり、各専門分野にとって、たとえば学術の発展、人材養成などを支えてきた機関の歴史として、必読文献になる必要がある。このことは大学史、沿革史の義務であり、決して物好きの成し遂げられるものでなく、編纂は純学術的事業であることを示す。そして、いずれ誰れもがもっと自由に大学について書くことが出来る時代がくる。自由な大学史が出来、そのうえで本当の正史が編纂されるというのが論理的に一番健全である。最近そのレールが敷かれはじめた、と述べて講演がしめくくられた。

(1)「大学史・高等教育研究史の課題と展望」『日本教育史研究』第５号、1986年。

(2)「日本における大学史研究の動向と課題―大学史編纂を中心にして―」『東洋大学史紀要』第４号、1986年。

1993年度合同研究部会報告

中央大学広報部大学史編纂課　中川　壽之・松崎　　彰

はじめに

1993年度の東日本大学史連絡協議会（旧関東地区大学史連絡協議会）と西日本大学史担当者会の合同研究部会は、「大学史資料の収集・保存と活用－年史編纂と資料館の現状－」を統一テーマに掲げ、明治大学創立100周年記念大学会館および中央大学駿河台記念館をメイン会場として10月６日から８日にかけて開催された。前年度に続き第２回を迎えた合同研究部会の参加大学は、東西の両会を合せて40校、参加者は、のべ84名にのぼった。

「明治大学の歴史展」の見学・講演会

合同研究部会初日の10月６日は、両会のメンバーが明治大学創立100周年記念大学会館父兄センター会議室に集合し、「明治大学の歴史展」に参加した。午後２時から記念講演会が開催され、明治大学岡野加穂留学長による開会の挨拶に続いて、百年史編纂委員会委

員長中村雄二郎法学部教授が、「近代史としての大学史」という演題で講演をおこなった。司会は、歴史編纂事務室事務長内河久平氏であった。

講演後、歴史編纂事務室鈴木秀幸氏から、同大学の100年史編纂事業の概要と歴史展の趣旨・内容の説明があった。説明終了後、参加者は3班にわかれ、鈴木氏および歴史編纂事務室の福井淳氏・渡辺俊子氏の解説により「1　創立前夜」以下6コーナーに展示された大学史関係の絵画・写真・文書資料などを見学した。

なお、中村先生の講演内容などについては、本号に掲載した鈴木氏の論稿を参照していただきたい。

展示見学後、会場を中央大学駿河台記念館に移し、研修懇談会が開催された。同志社社史資料室長河野仁昭氏の挨拶に続いて明治大学内河氏による乾杯の音頭で幕が開くと、会場は、東西約1年ぶりの再会の場となって歓談に花が咲いた。新規参加校の自己紹介も和やかなムードのうちに進み、昨年にも増して各大学の親交を深めることができた。司会進行役は、神奈川大学大学資料編纂室の澤木武美氏にお願いし、東海大学資料室長竹市知弘氏の閉会の辞によって幕を閉じた。

講演会

翌7日は、中央大学駿河台記念館に集合し、中央大学広報部長浜松晃氏の挨拶をもって研

1993.10.7 合同研究部会

究会を開会した。午前中は、立教大学の寺崎昌男文学部教授に「大学史と大学史編纂について」と題する講演をお願いした。寺崎先生は、従来の教育史や歴史研究一般における大学史の位置づけを概観された上で、より具体的に戦前・戦後の日本の大学史編纂の歴史と状況について述べられ、現在の大学史がかかえる問題として学内資料の不足と保存の立ち後れや個別大学史を通しての日本近現代史へのアプローチなどの諸課題について指摘された。なお、講演の詳細については、本号に掲載された中野氏の報告を参照していただきたい。

パネルディスカッション

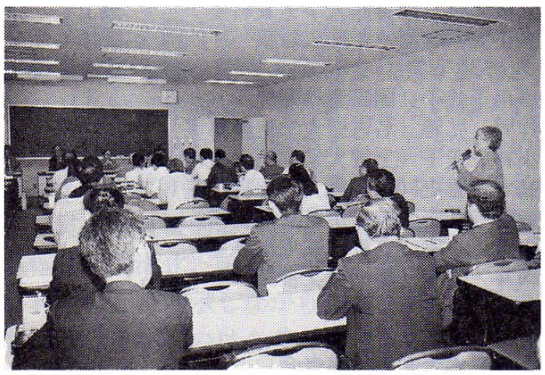
次いで、午後からは今回の統一テーマである「大学史資料の収集・保存と活用－年史編纂と資料館の現状－」にもとづいてパネルディスカッションが開かれ、日本大学大学史編纂室の近沢昭一氏「日本大学百年史編纂業務の現状」、神戸女学院大学史料室の若山晴子氏「神戸女学院史料室の現状」、神奈川大学大学資料編纂室の入谷秀夫氏「『大学史』編纂・資料保存等に関するアンケート結果」の3報告がおこなわれた。

近沢氏は、まず日本大学・同大学史編纂室の沿革とこれまでの刊行物を紹介された。次に百年史刊行計画の経緯および編纂委員会・同専門部会の設置に言及し、専門部会討議事項を中心に百年史編纂業務の実態について詳細に報告した。同氏は、特に編纂体制整備に先行した企画による予算等の問題について具体的に展開され、また「日本大学百年史」第1巻稿本刊行に際して生じた執筆に関する諸問題や出版社選定についても言及された。

若山氏は、「資料館の現状」という課題に沿って、まず神戸女学院大学史料室の学院内における組織上の特性として院長直属の組織であることを強調された上で、一般経費は法人管轄、業務内容から実質的な管轄は学長および大学事務長がおこない、史料室の運営は専門委員会・運営委員会が設置されている点を指摘された。次に史料室の日常業務については、学院に関する文書的諸資料の整理と学院史全般についての情報提供を強調され、収蔵スペースや資料整理のための人員確保が今後の課題であると述べられた。

入谷氏は、まず大学史編纂に関わる機関が共通の資料として活用することを目的に、東日本大学史連絡協議会初の試みとしておこなわれたアンケート調査実施の経過を説明し、

次に回答の集計結果の概要を報告した。報告の要旨は、すでに「『大学史』編纂・資料保存等に関するアンケート結果」として同協議会会報『大学アーカイヴズ』第9号（1993年9月30日発行）に掲載されているので、詳細については同号を参照していただきたい。



パネルディスカッション

3報告の終了後、中央大学広報部大学史編纂課の松崎彰・中川壽之を司会・書記として参加者とのディスカッションに入った。はじめに、3報告についてアトランダムに質問を受けたが、若山報告に対して史料室と図書館との関連について質問があり、史料室が学内外の幅広い活用を目的にして図書館所蔵資料の整理に携わっているとの応答があった。

次いで、報告とアンケート結果を前提としながら各大学における年史編纂や資料館の現状のなかで現在直面している諸問題をめぐって、さらに質疑応答がかわされた。年史編纂については、年史刊行計画等の企画先行がもたらす問題点や、編纂体制をめぐって各大学の事例が紹介され、委員会制によるメリット・デメリットや担当部署の人的構成などの問題について討議がおこなわれた。資料館の現状に関しては、各大学から事例報告を兼ねて、まず収集資料の保存と公開についてその方法と問題点につき質疑応答がかわされ、さらに年史編纂・資料購入・資料館経常費などの予算をめぐっても具体的に各大学の運用の実態について質疑応答がかわされた。また、年史編纂後の資料収集・保存体制にむけて資料館構想を提起する場合、ただ建物をつくるというだけではなく、専門的職制などその質と内容も合せて考慮していく必要性が強調された。

ディスカッションでは、年史編纂・資料保存・資料館運営にともなう企画・人事・予算・収集資料の継承など多岐にわたって問題が提起された。改めて課題の多さが浮き彫りとなったが、今後もこれらを継続的により深く検討していくことでディスカッションを終了した。

江戸東京博物館の見学

最終日の10月8日は、'93年3月にオープンした江戸東京博物館に集合し、同館を見学した。

見学に先立ち、梅花学園資料室遠藤トモ氏から合同研究部会閉会の挨拶があった。その後、1階ホールで展示資料課学芸員岡野友彦氏から開館までの経過・施設概要・事業活動・常設展示および企画展示の概要などについての説明をうかがった。

岡野氏の案内で収蔵庫を見学

次いで、2班にわかれ、同氏の案内により1階の荷解室・燻蒸室・仮収蔵庫・資料整理室・スタジオ・展示準備室および4階の収蔵庫を見学した。特に4階部分全体を占める収蔵庫では、形態や材質などによって種類別に区分された映像・音響収蔵庫、展示収蔵庫、考古収蔵庫、漆器収蔵庫を見学した。岡野氏には各収蔵庫の仕様・収蔵資料の情報管理等について懇切丁寧にご説明いただいたが、メンバー一同その規模の大きさと内容に驚き、圧倒されんばかりであった。この施設見学をもって3日間にわたる第2回合同研究部会は

一応終了し、この後参加者は常設展示・企画展示を各自見学して自由解散した。

むすび

大学史資料の収集・保存と活用を年史編纂と資料館の現状という二つの視点から捉えようとした今回の合同研究部会では、年史編纂の理念や方法について中村先生や寺崎先生の講演から学ぶところが多かった。また、具体的な実態について各大学の事例が多数報告され、質疑応答が活発におこなわれたことは、問題の多様性と切実さを再認識させると同時に、各大学とも苦心しながらそれぞれの立場から直面する課題に対応していることが実感された点で、たいへん有意義であったといえる。さらに今回、共通の資料として提供された「大学史」編纂・資料保存等に関するアンケート調査の結果が、今後の大学史を考える上での手がかりとなり、各大学の基礎データとして大いに有効利用されることを期待したい。

最後に、上記のアンケート集計結果をまとめてくださった神奈川大学の入谷氏、また江戸東京博物館見学の仲介の労をお取りくださった國學院大学校史資料室の益井氏をはじめ、第2回合同研究部会開催にご尽力くださった各位に御礼を申し上げてむすびとしたい。

〈参加者一覧〉

＊東日本大学史連絡協議会

愛知大学　50年史編纂事務室　藤本　光夫
林　徳太郎
神奈川大学　大学資料編纂室　澤木　武美
入谷　秀夫
関東学院　総務部学院史資料室　末崎　恵
慶應義塾　福澤研究センター　中森　東洋
宮城　勇
國學院大学　校史資料室　益井　邦夫
成蹊大学　総務部学園史料館事務室
原田　清美・松浦田鶴子
小野　恭子
専修大学　年史資料室年史資料課　西　慶一
玉川大学　図書館学園史料室　潟山　皓一
岩渕　文人
中央大学　広報部大学史編纂課
浜松　晃・村松　良人
沖田　哲雄・角田　茂
中川　壽之・藤田　正
松崎　彰
津田塾大学　学長事務室　丸山　昌子
東海大学　資料室　竹市　知弘
小林栄美子・日露野好章
東京経済大学　学長室　手島　修蔵
中村　青志
東京女子医科大学　大学史料室　森田　恵美
東洋大学　井上円了記念学術センター
高木　宏夫・三浦　節夫
山内　瑛一・豊田　徳子
日本工業大学　資料室　藤田　則夫
日本女子大学　成瀬記念館　秋山　倶子
日本大学　大学史編纂室　近沢　昭一
柏村　哲博・小松　修
法政大学　多摩図書館資料課　鬼柳　正信
宮城学院女子大学　資料室　伊勢　文夫
武蔵学園　企画室　鈴木　勝司
川村　政義
武蔵野美術大学　大学史史料室　渡辺　博志
高田　知美
明治大学　歴史編纂事務室　内河　久平
鈴木　秀幸・渡辺　俊子
湯本　恭子・福井　淳
立教大学　図書館大学史資料室　最上　登
立正大学学園　企画広報室　安中　尚史
佐々　博史
小川千代子（国際資料研究所）
片岡　弘勝（名古屋大学史編集室）
小林　愛子（上智大学聖三木文庫）
高木　雅史（名古屋大学史編集室）
寺崎　弘康（神奈川県立博物館）
中野　実（立教学院史編纂室）
細井　守（藤沢市文書館）

＊西日本大学史担当者会

大阪経済大学　総務部　川村　孝則
大阪国際大学　本部広報室　藤江　宗一
大谷大学　事務局長　朽木　明暁
真宗総合研究所　佐々木令信
追手門学院大学　経済学部教授　宇田　正
記念資料室　杉浦　義雄
庶務課企画係　長井　弘年
関西大学　事業局出版部出版課　熊　博毅
神戸女学院大学　史料室　若山　晴子
寺西裕加恵
神戸山手学園　学院史編纂準備室
野中　俊男・松井　文雄
西南学院大学　広報・調査課　芳永　弘
天理大学　広報部広報課　北村　純明
同志社大学　社史資料室　河野　仁昭
南山大学　総務部広報室　西田　博
梅花学園　総務部資料室　遠藤　トモ
福岡大学　企画部広報課大学史資料室
後藤　正明・藤本　俊史
桃山学院　学院年史委員会　原　登久雄
学院年史委員　西口　忠
立命館大学　百年史編纂室　西川　賢
龍谷大学　大学史誌編纂室　向山　晃祥
花月　大誠

（五十音順・敬称略）

1993年11月18日（木）研究部会

『武蔵七十年史－写真でつづる学園のあゆみ』編纂について

武蔵学園七十年史委員会委員長　大　坪　秀　二

93年６月に刊行された『武蔵七十年史－写真でつづる学園のあゆみ－』（以下「年史」という）の編集委員長という立場で感じましたことを「まとめ」というかたちでお話しさせていただきます。

当初、主たる読者対象としては、同窓生を考えておりましたが、編集作業をすすめていくなかで、同窓生だけが懐かしみを覚えるものであってはならないというように考えるようになり、今いる在学生やその父母、将来入学してくる学生・生徒、現在および将来の教職員にもぜひ読んでほしいものがたくさんあるんだということを、当然のことながら次第に意識するようになりました。したがって、写真、資料等をセレクトする場合の基準も方針変更せざるを得なくなり、頁数が限られているとはいえ、ほんのいくつかでも後々まで心に響くような資料等をつとめて掲載するように努力しました。

資料、写真等が発生した時期と以後では、価値が非常に変化するものだということを、編集作業を通じて今更のように“ああそうか”というふうに思いました。写真にしても、たとえば写される時には、単にイヴェントの記録にすぎないわけですが、その後数十年という年月を経ますと、そのイヴェントよりは、むしろ背景として写っている周囲の風景のほうが、いまや貴重となっているケースもあります。また、被写体としての人物が、現在社会的に大きな仕事をされているのをみる時、その写真のもつ意味が重要になってくるというか、大きな驚きを感じました。文書資料の場合でも、本学園では、非常に古い時代の学生・生徒の文集がたくさん残っているわけですが、これらのものをみていきますと生徒の時にある種の事柄に興味をもって発表した人が、世の中に出てから数十年を経て、既にその道では世界的な学者になっている方がおられます。そのような方々の場合、学問における一番最初のスタートが中学１，２年の時の小さな文章のなかにあることを発見することができた、というようなこともありました。これらのことは、記録をみる大きな喜びであると感じました。

年史の編集作業をしてみてひとつ空しく感じましたのは、写真とか記録文書だけを並べていきますと、歴史に残らないような歴史というものがたくさんあり、それを叙述するには、主観に頼らざるをえないところがどうしてもあるということです。今回の編集では各篇冒頭にその時代のアウトラインについてだけ主観で千字程度にまとめたわけですが、それ以外のところは、一切こういったことは避けました。しかし、歴史に残らない歴史についても、今後百年史を編纂していく過程でなんらかの形で残していくことが、非常に大事なことではなかろうかと思っております。学園のありかたを決定づける動機というものは、多分大げさなかたちでは残らないだろうと思います。ニーチェのいう「真理は鳩の足でやってくる」というのと同じで、最初はたいしたことでないことが、それが実は、後々発展して非常に大きな意味を学園でもつようになるのであろうと思います。ことにつくづく自分でも感じますことは、何かをしたということは、まだ残るので、これをしたということがあれば、それが動機となってこうなったということが残るわけですけれども、何かをしなかったということが、その後を決定づけるということがたくさんあるんだと思います。そうすると、しなかったことは、しなかったんだから何も残らないわけです。たとえば誘惑にのらなかったとかいうようなことは、誘惑のほうが記録に残らなければ、何も残らないということです。そういう意味でこれから先、正史を考える場合に、こういったことが、その後の学園の歩みに、こういう意味をもっていたということを言い残せる人間というものは、そんなにたくさんいないだろうと思います。そういうものを残していくという作業も

報告する大坪秀二氏

かなり大事になるのではないかと思ったわけです。

写真資料について、戦前と、戦中・戦後の10年間ぐらい、それから現在と、この三つの時代に分けますと、写真というものが大きく変化したと思われます。戦前の場合は、ほとんどが写真の専門家が写したもので、これは大概、かまえて写した乾板の写真でして、ピントもよければ、保存状態も非常によく、後々まで残ると思います。画像が非常に良質でして動きがないけれどもきっちりしています。戦中・戦後はフィルムがないし、写真をとるような余裕もない時代で、ほんのわずかしか残っておりません。残っているものでも、写真としての価値はゼロに近いようなものだけです。ところが、昭和30年代になりますと、個人個人がカメラをもつ時代になってきまして、この年史にも、生徒が修学旅行でほとんど全員がカメラをかまえている写真を一枚象徴的にいれておきました。これらの写真はたくさん写されるかもしれませんが、今度の年史みたいなものには、ほとんど使えなかったというのが実状です。その意味で写真がたくさんあるからといって安心できないということを痛切に感じました。大学においても、卒業記念アルバムが30年以上続いておりますが、この中に資料として意味をもつ写真がどれだけあるかみましたところ、毎年、同じパターンで編集されているため、年史に使える写真はほとんどありませんでした。今後、学園として記録に残す写真を撮る場合には、われわれ個々人がよっぽど心掛けて撮らないと、つい、みんなが写真を撮っているからと安心して、結局何も残らないものなのだと感じました。

昭和27年、現在の天皇陛下が皇太子殿下の時代に本学園にこられまして、その時の写真があるんですが、それは何かといいますと16ミリフィルムのシネなんです。今の時代ですと、むしろシネみたいなものが周囲の環境を撮っていて、単発の写真ではなかなか良い情報が残らないらしいということも、ひとつの教訓でした。

今後の課題ですが、今の写真の資料でいえば、昔のものは小数精鋭の写真で、数は少ないながら、今や貴重な写真ばかりだというのに対して、しばらく前から現在、そして現在から将来にいたる写真というのは、多分、やたらとたくさんあり、その中から何を残していけばよいかと選択に頭を悩ます時代ではないかと思います。しかし今、写真を写した段階で、これはいらないと思っているものが、50年経つと必要になるかもしれないという恐ろしさもあります。資料であればなんでもとっておけばいいのかというと、収納スペースの関係から多過ぎて困るということもあり、今のところ頭を悩ましている段階ですが、いずれ、これについては考え方をきちんとして、方針を打ち出そうと考えております。

ご静聴ありがとうございました。

常任委員会議事録（抄）

第39回　1993年10月6日(水)12時30分～13時
会　場　明治大学創立100周年記念大学会館
　　5階父兄センター会議室
出席校　神奈川大学　國學院大学　成蹊学園
　　玉川大学　中央大学　東海大学
　　日本工業大学　日本大学　明治大学
議　事　(1)1993年度合同研究部会準備作業
　　(2)その他（宮城学院女子大学の本協議会入会を1993年10月5日付で承認する）

第40回　1993年11月18日(木)13時30分～14時30分
会　場　武蔵大学　5号館2階会議室
出席校　神奈川大学　成蹊学園　玉川大学
　　中央大学　東海大学　日本大学
　　明治大学　中野実（オブザーバー）
議　事　(1)1993年度研究部会について
　　(2)1994年度合同研究部会について
　　(3)その他

第41回　1994年1月20日(木)14時～15時30分

会　場　中央大学駿河台記念館510号室
出席校　神奈川大学　國學院大学　成蹊学園
　　玉川大学　中央大学　東海大学
　　明治大学　中野実（オブザーバー）
議　事　(1)1994年度合同研究部会について
　　(2)1994年度事業予定等について
　　(3)その他

研究部会記録（抄）

第26回　東日本大学史連絡協議会・西日本大学史担当者会合同研究部会
　　1993年10月6日(水)～10月8日(金)
会　場　10月6日　明治大学創立100周年記念大学会館父兄センター会議室
　　同校友センター会議室
　　中央大学駿河台記念館520号室
　　10月7日　中央大学駿河台記念館610号室
　　10月8日　東京都　江戸東京博物館
参加校　東日本　24大学、7個人会員
　　西日本　16大学
　　計40大学、7個人会員　85名
見　学　10月6日　明治大学の歴史展（明治大学大学会館6階校友センター会議室）
　　10月8日　東京都江戸東京博物館
　　（燻蒸室・収蔵庫・資料室などを見学後、展示見学）
講演会　10月6日　中村雄二郎氏（明治大学歴史編纂委員会委員長・明治大学法学部教授）
　　（演題）「近代史としての大学史」
　　（明治大学大学会館5階父兄センター会議室）
　　10月7日　寺崎昌男氏（立教大学文学部教授）
　　（演題）「大学史と大学史編纂について」（中央大学駿河台記念館610号室）
パネルディスカッション　10月7日
　　報告1　「年史編纂業務の現状」
　　近沢昭一氏
　　（日本大学大学史編纂室）
　　報告2　「資料館の現状」
　　若山晴子氏（神戸女学院史料室）
　　報告3　「大学と資料保存」
　　入谷秀夫氏
　　（神奈川大学大学資料編纂室）
　　司会　松崎　彰氏
　　（中央大学大学史編纂課）
　　書記　中川壽之氏（同上）
※講演会・パネルディスカッションの内容につきましては、本号に掲載した諸報告をご参照ください。

第27回　1993年11月18日(木)　14時30分～17時30分
会　場　武蔵大学5号館2階大会議室
参加校　22大学1個人会員　計33名
報　告　大坪秀二氏（学園七十年史委員会委員長）
　　「『武蔵七十年史－写真でつづる学園のあゆみ』編纂について」
※研究部会の内容につきましては、本号に掲載した大坪氏の報告をご参照ください。

第28回　1994年1月20日(木)　15時30分～17時
会　場　中央大学駿河台記念館510号室
参加校　21大学2個人会員　計30名
講　演　網野善彦氏
　　（神奈川大学短期大学部教授）
　　「資料学をめぐる諸問題」
※講演内容は、次号に掲載する予定です。

『大学アーカイヴズ』
NO.1～NO.9　総目次

NO.1（1989.1.10）
発刊にあたって
関東地区大学史連絡協議会規約
（資料）「関東地区大学史連絡協議会」設立までの経緯
関東地区大学史連絡協議会会員名簿
関東地区大学史連絡協議会設立総会議事録
常任委員会議事録／研究部会記録
会員校の紹介／ミニ情報／ご案内
NO.2（1990.1.25）
カードからディスクへ－高機能パソコンによるシステム構築－　中野　実
史料収集と分類整理の一試案　岩淵　文人
文書管理と公文書館　水口　政次
関東地区大学史連絡協議会会員名簿
1989年度総会議事録
常任委員会議事録／研究部会記録
会員校紹介／ミニ情報／ご案内
NO.3（1990.11.2）
部会報告を聞いて　小林　愛子

1990年度総会議事録（抄）
常任委員会議事録（抄）／研究部会記録（抄）
資料室の建設とアンケート調査　松本　義男
会員校紹介／ミニ情報／ご案内
NO. 4（1991.3.25）
大学史の課題と資料室　河野　仁昭
史料の修復保存についての課題　坂本　勇
「西日本大学史担当者会」発足までの経緯
遠藤　トモ
常任委員会議事録（抄）／研究部会記録（抄）
ミニ情報／ご案内
NO. 5（1991.10.21）
表具の世界　益井　邦夫
大学のもつ博物館の機能とその教育的効果
日露野好章
関東地区大学史連絡協議会会員名簿
1991年度総会議事録（抄）
常任委員会議事録（抄）／研究部会記録（抄）
ミニ情報／ご案内
NO. 6（1992.3.18）
大学史編纂と人物史　遠藤　トモ
国立公文書館所蔵文部省公文書の追加公開
米田　俊彦
『武蔵野美術大学60年史』編纂に関する部会報告を聞いて　北村　孝
常任委員会議事録（抄）／研究部会記録（抄）
ミニ情報／ご案内
NO. 7（1992.9.28）
「保存」から見た紙資料の展示の考え方と技術
木部　徹
関東地区大学史連絡協議会会員名簿
早稲田大学大学史編集所と百年史編纂について
1992年度総会議事録（抄）
常任委員会議事録（抄）／研究部会記録（抄）
ミニ情報／ご案内
NO.8（1993.3.31）
資料整理とその管理　宇野　文男
1992年度合同研究部会を終えて
藤田　正・松崎　彰
戦後教育改革に関する資料と研究　佐藤　秀夫
マイクロフィルム版　福澤関係文書について
常任委員会議事録（抄）／研究部会記録（抄）
ミニ情報／ご案内
NO.9（1993.9.30）
『立正大学の120年』編纂について
安中　尚史
大学史編纂と年報　中野　実
1993年度総会議事録（抄）
常任委員会議事録（抄）／研究部会記録（抄）
「大学史」編纂・資料保存等に関するアンケート結果　常任委員会（文責・入谷　秀夫）
東日本大学史連絡協議会規約
東日本大学史連絡協議会会員名簿
ミニ情報／ご案内

ミニ情報

※『中央大学史資料集』第12集
国立公文書館に所蔵されている『公文録』・『公文類聚』などの公文書から中央大学の関係資料を採録。1994年２月刊行

※『中央大学百年史編集ニュース』第21号
創立者の一人である渡辺安積の資料調査短報と収集資料の紹介。1994年３月刊行

※『中央大学史紀要』第５号
1994年３月刊行
鮎沢成男「新制大学の発足と『学校法人中央大学基本規定（寄付行為）』（1953年12月）－制定までの経過－」他を収録。
（中央大学大学史編纂課）

※『神奈川大学史資料集』第十集刊行
1994年３月（神奈川大学大学資料編纂室）

ご案内

本協議会に関するお問い合わせ、入会申し込みは、下記事務局へご連絡ください。

〈事務局〉
中央大学広報部大学史編纂課
〒192-03　東京都八王子市東中野742－1
☎　0426－74－2132

〈会報編集担当〉
神奈川大学大学資料編纂室
〒221　横浜市神奈川区六角橋3－27－1
☎　045－481－5661
東海大学資料室
〒151　渋谷区富ヶ谷2－28－4
☎　03－3467－2211
中野　実（東京大学史史料室）
〒113　文京区本郷7－3－1
☎　03－3812－2111